

石干見の呼称に関する覚え書き

田 和 正 孝

はじめに

伝統漁法石干見が、近年、環境教育やツーリズムのための装置として脚光を浴びはじめている。漁具自体のユニークな形状のほか、遊びの空間として海をとらえる視点が社会一般に高まり、石干見が安全に楽しく魚を捕らえることができる水辺を提供すること、石を積むという人間による行為が生物を蛸集させ、結果的に生物多様性を育むと考えられることなどに注目が集まっているからであろう。このような時期を迎え、石干見をめぐる地域の動きや学界の動向を俯瞰するとき、いったい、石干見に関する研究はこれまでどのように進められてきたのか、なぜ今、石干見が注目されるのか、今後いかなる石干見研究をなすべきかなどを検討することが必要となっている。筆者は、こうした状況をふまえ、これまでの石干見研究をあらためて回顧し、近年の研究にみられる特徴を整理した（田和二〇一一）。その結果、伝統的な漁業文化の見直しや、沿岸域・河口域の環境保全などが注目されるなかで、石干見に関しては以下のような研究の可能性と課題を有していることが明らかとなった。すなわち、

① 石干見研究の史的展開

② 石干見の名称をめぐる問題

③ 石干見データベースづくり

④ 石干見漁業活動の調査

⑤ 石干見の保存・再生・活用をめぐる議論

の五つの課題である。小論ではこれらのうちから石干見の名称をめぐる問題をとりあげる。

石干見は、古くから存在する特徴的な漁法といわれながら、漁業史の中に定位されず、十分な説明もなされてはこなかった。たとえば、一八九五年（明治二八）に完成した『日本水産捕採誌』（農商務省水産局編 一九一〇）にあるエリフシツ鱈エリフシツ類の項目や、第二次世界大戦前に企画され戦後に出版された『明治前日本漁業技術史』（日本学士院・日本科学史刊行会編 一九五九）には石干見に関する記載がない。民俗学や民具学における石干見の記述も決して多いとはいえない。また、「潮位差が顕著な海岸部に岩塊や転石、サンゴ石灰岩などを馬蹄形や方形に積んで構築した大型の定置漁具で、石積みは、満潮時には海面下に没し、干潮時には一部または全部が干あがるように築かれ、上げ潮流とともに接岸する魚群のうち下げ潮流時に沖へ出遅れて石積み内に封じこめられてしまうものを漁獲する装置」という特徴を有するこの漁具の一般名称として、学界で「石干見」がなぜ使用されるようになったのかも、特に議論されたことはない⁽¹⁾。辞書的には、たとえば、『大辞典』（一九三五）に、イシヒミ（石干見）が掲げられており、「原始的な漁法で、内灣の干潟に石を積んで垣網の如き装置にし、中央に魚溜りを作って水族を集め潮の干満を利用して獲るもの」との説明がある。しかし、石干見を『大辞典』の通りイシヒミと読んだのか、あるいは学界で定着した名称といってもよいイシヒビと読んだのかさえも現在まで明確になっていない。民具学においては、民具のデータベース化の前提として標準名を整えることが課題となっており、またデータベース化が民具の広域比較を可能にするとも指摘されている（河野 二〇一一）。石干見の名称についてたどる作業が求められる根拠がこのような議論のなかにも存在している。

小論では、以上のことをふまえ、文献資料や現地調査で得た聞き取り結果などに基つきながら、日本における石干見の地方名とその分布、行政用語としての石干見の定着などについて考えてみたい。なお小論で用いる石干見という用語の使用については、以下の通りとする。漢字表記の石干見は基本的には学術用語ないしは一般名として用いている。読みは「イシヒビ」とする。地方名を表す場合にはカタカナを用いる。文献を引用する場合には、原文に従うため、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字表記が混じるが、誤解を避けるため必要に応じて補足説明を加えたい。

第一章 石干見の分布と地方名

日本における石干見の分布域については、これまで繰り返し指摘したように、詳しく考察されたり、地図化されたりすることがほとんどなかった（田和 一九九八、二〇〇七）。石干見研究の第一人者であった西村朝日太郎（一九六九）も、分布域を、「日本では沖縄、奄美大島、九州、五島列島、山口、和歌山など」と大枠でとらえているだけである。九州、沖縄では、分布域を現況から十分確認できるが、はたして山口県や和歌山県にも石干見が存在したのだろうか。この根拠となる資料を、西村とともに各地の石干見を調査した小川（一九八四）が残している。これは日本定置漁業研究会による『定置漁業権調』（一九三九年三月）の一部で、魩鱇類漁業に含まれる石干見の漁具数を、一九〇七年（明治四〇）末から一九三六年（昭和一一）末にいたる約三〇年を五期に分けて掲げた県別統計表である。この表によると、石干見が存在したところは、和歌山、山口、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、沖縄の各県であった。ただし、表には石干見がかつて数多く存在した奄美大島（小野 一九七三、水野 一九八〇、二〇〇七）を含む鹿児島県は掲載されていない。筆者自身は、小川が用いた統計表のほかは、山口県と和歌山県に石干見があったことを裏付ける資料をいまだ確認できていない。

石干見は、各地で様々な名称で呼ばれていた。西村（一九六九）は、「名称は大体、沖縄、奄美の *SUKI* (垣) 系統と、九州一円で用いられている *suki* (掬い) 系統に大別できるようだ」と述べている。小川（一九八四）は「九州の有明海の諫早湾（泉水海）・島原半島・宇土半島付近に見られるものはスッキイといわれ、周防灘の福岡県・山口県沿岸にみられるものはイシヒビといわれる」と記している。筆者も石干見の地方名に関心をいだき、文献調査および現地でのききとり調査を続けてきた。以下では、九州地方と奄美・沖縄地方とに分けて、石干見の地方名について考察しよう。

（1）九州地方における石干見の名称

奄美・沖縄地方を除く九州各地では、福岡県、大分県の周防灘（福岡県南部、大分県では旧国名を用いて豊前海とも呼ぶ）沿岸にみられるのがイシヒビ、あるいはヒビ、諫早湾（泉水海）、島原半島、宇土半島付近にみられるものはスクイ、スキ、スッキイ、スツキ、長崎県五島列島上五島ではスクウイ、下五島福江島ではスケ、スケアン、スケアミ、熊本県、鹿児島県の出水あたりではスキ、スクイなどと呼ばれることがわかった（柳田・倉田 一九三八、田和二〇〇二）。ただし、長崎県諫早市北高来町から約三〇キロメートル隔てた佐賀県鹿島市七浦嘉瀬ノ浦にあった石干見はイシアバ（佐賀県教育庁社会教育課 一九六二）あるいは単にアバと呼ばれていた。地元での聞き取りによれば、有明海・諫早湾で一般的なスクイという呼称はまったく用いられていなかった。鹿児島県阿久根の石干見はハト（波止）とも呼ばれた（小野 一九八八）ことも付け加えておきたい。なお、イシヒミという呼称は、研究書（小川 一九八四、大島編 一九七六）に使われているが、地方名としては福岡県築上郡三毛門浦の漁法として昭和初期の文献に掲げられているもの（福岡県水産試験場編 一九一七）のほかは確認できていない。また、現在までのところ各地のフィールド調査でもこの呼称を確認したことがない。

イシヒビの語源は、石で造られた^{ひび}筭すなわち石筭であろう。筭は、浅海に竹や竹などで編んだ簀を建ててつくった陷筭漁具を示す。ノリやカキを養殖するために海中に立てた柵状の構築物も筭と呼ぶ。筭は古くから知られており、『玉塵抄』（一五六三年成立）には「江や浦ニシバヤサ、ノハ葉ヲシカト立テ、ヨコニ水ヲセイテ魚ヲトルヲソレヲヒット云ソ」（中田編 一九七〇）とある。

一九六〇年代まで石干見が残っていた大分県宇佐市長洲ではこれをイシヒビあるいは単にヒビと呼んでいた。同市の文化財調査員を務めていた入学正敏（一九七五）が「筭（ヒビ）」というエッセイを残している。「ひび」には石ひび、竹ひび、木ひびなどがあること、長洲の東浜海岸には当時四基のひびが補修もされず放置されたままになっていたこと、ひびにはもともと所有者があり、それぞれ名前が付けられていて、東から「角兵ひび」「長ひび」「宮ひび」「兵作ひび」となっていたことなどを記している。福岡県豊前市松江浦の海岸には現在も石干見の跡が残っているが、これはヒビと呼ばれていた。このように、イシヒビとは称せず、単にヒビと呼んでいた地域も多かったと推察する。総称としてイシヒビを使用するよりも、ヒビの前に固有名詞などをつけて、敷設場所や所有者を特定する呼称の方が一般的であつたと考えられる。

それでは、石干見はイシヒビと読むのか、イシヒミなのか。ここであらためて考えておきたい。漁具としての筭は、古くは「ヒミ」とも発音した。すると石干見はイシヒビでもイシヒミでもよいことになる。音声学的に言えば、m音とb音とが変化し、それぞれに母音iがついた結果、イシヒミとイシヒビが併存するようになったと考えるのが適当である⁽²⁾。石干見という漢字は、後年になってこれらの呼称に対して充てられたものであろうと推察している。

スクイやスツキイなどは、「魚をすくう（抄う・掬う）」という漁業活動の内容からつけられた名称で、語源は同じであると考えられる。すなわち、石干見では潮がよく引いた時には、たも網やさで網を使って魚をすくうことができる。潮がもつと引くと、手ですくうことも可能である。そうした行為を反映する表現、あるいは石干見全体があ

たかも一つのたも網のごとく魚をすくいとつてしまふような状況を表現するものとして、この漁具名称が与えられたのではないだろうか。他方、小野（一九八八）は、かつてスキがあつた鹿児島県阿久根市三笠町の大漣うすきと小漣こすきという地名の語源を考え、これらの「漣」は「水をこす」のこすであり、「紙をすく」のすくであると述べる。これらはいずれも水の中にまざつた個体を、器を使って通し流し、個体を止める行為である。スキでは入つてきた海水と魚がまざつたもののうち、海水だけを通して、魚を残しとどめる。したがって、「漣」という漢字はスキを表現するのに最も適切な文字といえると、小野は考えた。大漣・小漣にあつたスキのなかには、自然にできている小さな入江を完全に遮断するようになかたちで石を積み形態のものがあつた。湾をたてきつた漁具から海水が抜け出てゆく状態に注目するならば、小野が指摘するように、スキは「漣き」を意味していることもうなずける。しかし、漢字で表わせば、「漣き」は「抄き」と同義語である。五島列島での呼称スケアン、スケアミは、「抄う・掬う」ないしは「漣ける」と「網」（アミないしはその転訛としてのアン）が合わさつてきたものと考えてよい。

長崎、熊本、鹿児島で呼ばれるスキを「漣き」に由来するものとするか、あるいは「抄い・掬い」から転訛したもののか、結論を出すにはさらに検討が求められるが、現時点において、小論では、スクイとスキを同じ語に由来するものとして、ひとまとめにしておきたい。

佐賀県鹿島市七浦嘉瀬ノ浦のイシアバ、あるいはアバという呼称について考えてみよう。アバには「網場」という文字を充てることができる。網場は漁場を意味する場合に用いられる。石を積んだ漁場ということで、イシアバと称したものであろう。イシアバは干潟の泥土があまり深くない七浦海岸の地勢を利用して構築されたものであつた。直径二〇～三〇センチメートルの自然石を高さ一メートルあまり半円形に積み重ねたもので、中央部には内側に向けて水路状になるように別に石を積み、そこは常に開口しているかたちとした（図1）。退潮時、この水路の外側部分にサデアミと呼ぶ長い袋網をすえておき、魚類やアミエビを漁獲した。イシアバは佐賀県教育庁社会教育課（一九六



図1 イシアバ（佐賀県鹿島市七浦嘉瀬ノ浦）
写真の撮影時期は1960年代後半。撮影者は藪内芳彦氏
(写真提供：藪内成泰氏)

(二) によれば、イシホシミとも呼ばれていたという。イシホシミについては、後章であらためて検討したい。

ところで、宇土半島の赤瀬、小田良にはスキンカキという名称が残っていたことを、このあたりの石干見を調査した多辺田（一九九五）が報告している。多辺田は、スキンカキとは「スキのカキ」であるとし、スキが次節で見えるような沖縄・奄美地方での石干見の一般名ともいえるカキと結びついていることを「興味深い」と述べている。

（2）奄美・沖縄地方における石干見の名称

奄美諸島、沖縄列島では、石干見は一般にカキあるいはカキイ、カキの古語であるカチなどと呼ばれた。そのほか、奄美大島ではカツイあるいはカクイ、徳之島では石垣ゴモイ、与論島ではカキチミ、宮古列島ではカツ、竹富島ではカシ、西表島でカシイ、白保島でカチイあるいはインカチイ、新城島ではハイシ、与那国島ではクミなどとも呼ばれた（柳田・倉田 一九三八）。ほとんどがカ

キかカチから転訛した名称である⁽³⁾。

カキの語源は、しきりや囲いを意味する垣に由来すると考えて間違いない。徳之島のゴモイとはコモイすなわち囲いの意味である（松山二〇〇四）。与論島のカキチミは垣積みからきた名称であろうと推察されている（与論町誌編集委員会編 一九八八）。クミは、魚を封じ「込める」というところからきた名称であるといわれている（喜舎場 一九三四）。「魚」という文字を垣の前につけて、ウオガキやナガキ、ユウカチ、イツカチ、あるいは「海」を前につけ

てウミガキや上述したインカチイなどと称した地域もあった。

島袋源七（一九七二）は、第二次世界大戦中に執筆した論文中で、「漁垣」という字をあてたナカチあるいはナガキについてふれている。ナは魚のことで、魚が獲れる場所が魚場（ナバ）である。魚場（ナバ）は漁場（ナバ）の読みと一致する。島袋は、別の論文（島袋 一九五〇）では、魚垣（ナガチ）と魚場（ナバ）という表記を使用している。魚垣（ナガチ）の別名として、ヒヤ、ヒヤク、ヤク、ヤキ、ヤツカなどがあつた。語源は判然としないが、これらには石室の意味があつたという。沖縄における魚垣の名称もカキで統一されるかのように感じられるが、元来、各部落によって異なつた名称で呼ばれていたことも島袋は指摘している。

沖縄列島、八重山諸島の海岸部に存在した石干見の正確な数や、魚とりがおこなわれていた当時の状況は十分にわかつてはいない。そのなかで武田（一九九四）が石干見（カチ（カキ））の分布図（図2）を描いているのは貴重な成果である。この図は、武田によると、市町村

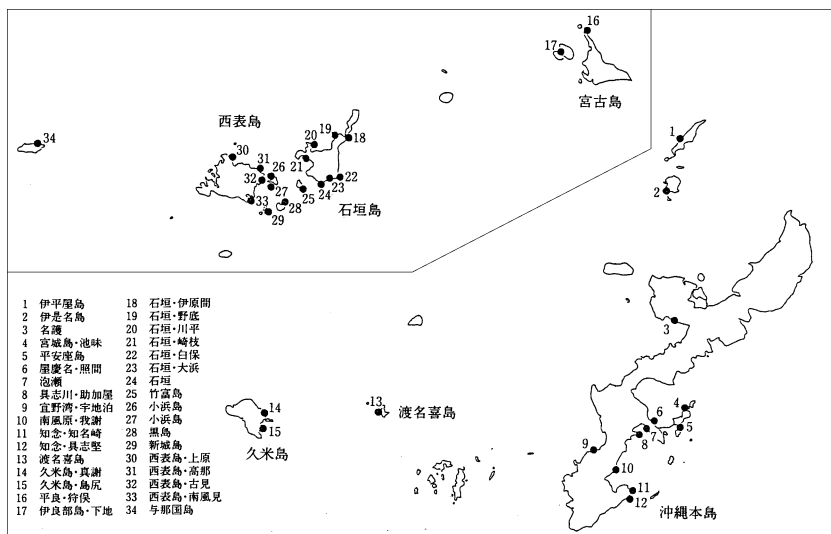


図2 沖縄における石干見（カチ・カキ）の分布
武田（1994）を一部改変。

史（誌）を渉猟し、集めた情報に基づいて作成したものであるという。本図によれば、カチ（カキ）は、沖縄本島では南部太平洋側の金武湾沿岸部（屋慶名、照間、宮城島、平安座島）、中城湾沿岸部（泡瀬、南風原、知念）および東シナ海側では名護と宜野湾に分布した。離島部では、沖縄本島に近い伊平屋島、伊是名島、渡名喜島、久米島と宮古列島宮古島、伊良部島、八重山諸島石垣島、竹富島、小浜島、黒島、新城島、西表島、さらには与那国島に分布していた。しかし、第二次世界大戦後、米軍の上陸用舟艇（LST）による演習、護岸工事などによって損壊が進んだ。木綿網やナイロン網を用いた漁法が普及したこともカチ（カキ）の利用を疎遠にしまった。カチ（カキ）に関する情報が残りにくい理由としては、これが日々の「おかずとり」のための装置、あるいは「あそびの空間」として利用され、ほとんど記録される対象でなかったことと、定置漁具としての漁業権申請が関係諸機関に対してなされなかったことが考えられる。一部の海岸が第二次世界大戦後アメリカ軍に接収されたため、そこへの立ち入りが一時期、制限されてしまったことも情報が残らなかったことと関係しているであろう。なお、武田は、分布図を作製した当時、利用されているものが八重山の小浜島、西表島、宮古の伊良部島だけに限られていたことを記している。

武田が描いたカチ（カキ）の分布図はきわめて精緻であるが、筆者の文献調査によって、沖縄本島では北谷町や金武町沿岸部、八重山諸島では石垣島宮良、波照間島にも石干見が存在したことが確認できた。沖縄の石干見に関連する研究書や報告書を渉猟したり、各地の市町村史（誌）類に所収されている記述をまとめたり、さらには聞き取り調査などを通じて石干見の名称について検討する作業がまだ残されている。

ところで、那覇市にある沖縄県立博物館には石干見の複製が展示されている。名称として魚垣（ながき）が掲げられ、以下のように説明されている⁽⁴⁾。

イノーに仕掛けるワナのひとつに魚垣があります。琉球諸島ではカチやカツなどと呼ばれています。

海の浅いところに石積み垣根をつくり、潮の満ち干を利用して魚を捕ります。石垣の切れ目に網を仕掛けて捕る原始的な漁法といえます。

石垣を築くときは、潮の流れや海底の地形、魚の習性を考えて位置や大きさ、形を決めます。

宮古列島の伊良部島佐和田浜には隣接する下地島の空港滑走路と向き合うように石干見が一基残っている。一九七九年に旧伊良部町の有形文化財（現在は宮古島市指定有形民俗文化財）に指定された。地元の人はこちらをカツと呼んでいる。海岸脇の道路沿いに設置された二枚の説明板には「魚垣（カツ）」と記載されている。また、このカツの所有者は、二〇〇五年に文化財の維持管理と普及啓発に尽力したことにより、沖縄地区史跡整備市町村協議会から表彰されているが、賞状に記載された文化財の名称は魚垣であった。二〇〇九年一月、カツの所有者に聞き取りをした際、ローカルな名称がいつの間にか魚垣（ウオガキないしはナガキ）という沖縄地方の一般名に取り込まれつつあることを、所有者自身が指摘した。地方名と一般名との間に新たな関係性が発生しているのである。沖縄におけるこのような事例は、学界で一般名としてすでに定着している石干見を使用するにあたって、地方名に対する十分な理解を前提にしなければならないという注意をあらためて喚起させる。

第二章 石干見の記録をめぐる

前章では石干見の呼称を主として空間的な広がりの中で把握することによって、地方名とその分布域を可視化することができた。それではこのような呼称がいつごろ出現し、記録として残されるようになったのか。本章では前章で討論したイシヒビ、スクイ、カキの三系統の呼称ごとにこの課題について検討したい。

(1) 石干見とイシヒビの記録

石干見の語源について、吉田敬市（一九四八）は、「明らかではないが恐らく石干見の中に残った魚を抄い獲るの義であり、石干見の漢字を充てたのは石垣の中の魚を干潮毎に行つて見て獲る事から因んだ名称であろう」と述べている。この文章の前半部から判断すると、吉田は、石干見をイシヒビあるいはイシヒミとは読まず、スクイと読んでいると判断できる。すでにふれたように、スクイは有明海周辺で使用される地方名である。吉田は長崎県南高来郡国見町（現在は雲仙市国見町）土黒^{ひしぐろ}の出身であつた。土黒には明治時代中期に二〇基近くのスクイがあつたことがわかつてゐる。したがつて吉田がスクイという呼称に早くから親しんでいたとも考えられる。吉田はスクイを説明するにあつて、当時すでに定着していたこの漁法の標準的な漢字表記を使つたのである。石干見の意味に関する吉田の説明は語呂合わせのようでもあるが、漁業活動を考えると、「干」と「見」が充てられたのもあながち無理な解釈ではないように思われる。

石干見という文字が用いられた資料のうち、筆者が確認できたなかでもっとも古いものは、一八八〇（明治二三）年に施行された福岡県の漁業税規則である。本規則の第一条には「漁業税ハ八等二分チ各村各種ノ税額ヲ定メ之レヲ課ス其目左ノ如シ 但網漁ハ網数ニ長縄漁ハ縄数ニ羽瀬石干見漁ハ箇所ニ捌リ課税ス」とある。条文に続いて漁業税目表が掲げられている。これを見ると、仲津郡の二地区（稻童、松原）、築上郡の七地区（湊、高塚、東八田、西八田、宇留津、松江、有安）、上毛郡の四地区（八屋、杳川、四郎丸、三毛門）に石干見があつたことがわかる。いずれも周防灘に面する地区である。前章で考察したように、この地域における地方名から考えて、石干見はイシヒビと読まれていたと判断して誤りはないであろう。税額は、六等級とされた年一円の三毛門の石干見を除くといずれも最下級の八等にあたる年二〇銭であつた。また、上記一三地区中三地区では漁業種類が石干見だけに限られていた（福岡縣廳庶務課別室資料編纂所編 一九四九）。

周防灘沿岸の村にあった石干見は、福岡縣水産試験場が一九一七年（大正六）に発行した『福岡縣漁村調査報告 漁業基本調査第壹報』において取り上げられている。一九一五（大正四）年二月の調査時、石干見は七村にあり、合計八九基を数えた（表1）。この報告書から石干見に関する記述を拾いあげてみよう。京都郡仲津村稻童は、「舊藩ノ頃ヨリ農業ノ傍ラ石干見ヲ経営セル」漁村であつた。築上郡三毛門村のうち漁業を営むものは大字沓川の一集落であつた。「約三十年前曾ツテ桹網ヲ経営セシムコトアリシガ現今漁戸十九何レモ農ヲ主トシ僅ニ漁業ヲ行フニ過ギズ建干網、徒歩曳網、石干見等アレドモ微々トシテ」振るわなかつた。稻童の記述からは、石干見の存在を藩政期にまで遡れる可能性を見てとることができる。『近代福岡県漁業史』をまとめた三井田恒博も、明治初期における福岡県下各浦の漁業概況を整理する際に『福岡縣漁村調査報告 漁業基本調査第壹報』の一部を引用し、石干見を藩期から続く漁法の一つとして説明している（三井田二〇〇六）。

なお、菅原道真が生きた時代に石干見が存在した可能性を示唆する挿話が築上郡椎田町の説明にある。すなわち「菅公左遷ノ際御船石干見ニ擱坐セルヲ漁夫等援ケ網ヲ敷キテ海濱ニ憩ハセ進ラセリ」ことがあつたという。九〇一年（延喜一）の出来事として興味深いものの、石干見が存在したことを証明するような記述ではない。

表1 福岡県の周防灘沿岸村における石干見の数（1915年）

		漁具数（基）	平均漁獲高（円）	総漁獲高（円）
京都郡	仲津村稻童	17	30	410
築上郡	八津田村	10	50	500
〃	椎田町	33	50	1650
〃	西角田村	6	25	150
〃	角田村松江	5	30	150
〃	三毛門村	13	20	260
〃	東吉富村	5	20	100
計		89		3220

注）京都郡仲津村稻童の総漁獲高 410 円は誤記で、正しくは 510 円であろう。そうすると総漁獲高合計は 3320 円となる。

（『福岡縣漁村調査報告 漁業基本調査第壹報』より作成）

他方において福岡県が一九二六年（大正一五）に豊前海地方の網漁具、釣漁具、雑漁具について調査した報告書（福岡縣水産試験場編 一九二七）には、築上郡三毛門浦の石干見が収録されている。ここでは掲載された漁具名タイトルにある「干見」の文字に対して読みが「ひみ」とふられている。水産行政の用語としてイシヒビではなく、「いしひみ」が使用されていた可能性を示唆する貴重な資料ともいえる。

学術書に石干見が初めて記述されたのは、一九〇五年（明治三八）に出版された岸上鎌吉の『水産原論』と思われる。岸上は農商務省勤務を経て、東京大学教授となつた水産学者であり動物学者であつた。本書の漁撈に関する解説のなかで、筌うけ、簾やなに続いて「かへぼり」（かいぼり）をとりあげる。かへぼりは水面の一部を、土石などを用いて区画し、区画内を排水して残つた魚をとるもの⁽⁵⁾で、「未開時代」におこなわれ、漁具も別途必要としなかつた。岸上は、「かへぼりニ似テ殊ニ水ヲ除クニ干潮ヲ利用スルモノ」を、「建干たてぼし及ヒ九州ニ行ハル、羽瀬、石ひゞノ類ナリ」とした。さらに、原始陷筌類の漁具を説明する文中で、「立干、石干見、羽瀬、八重浜、いか曲立網等舉ナ此類ニ属ス」と今度は石干見という漢字表記を用いている。なぜ、漢字と仮名まじりの表記と漢字表記とを併用したのか、今となつては知る由もない。なお、石ひゞが九州でおこなわれていると特定している点にも注目しておきたい。

岸上は『水産原論』の増訂版を一九〇九年（明治四二）に出版している。内容は初版本とほとんど変わりが無い。しかし、前述した「建干たてぼし及ヒ九州ニ行ハル、羽瀬、石ひゞノ類ナリ」の部分は、「建干たてぼし及ヒ九州ニ行ハルル羽瀬、石干見ミノ類ナリ」と変更され、「立干、石干見、羽瀬、八重浜、いか曲立網等舉ナ此類ニ属ス」というように石干見にルビを打ち、呼称をイシヒミに統一している。前著のイシヒビという呼び方からなぜイシヒミに変えたのか、改訂と修正の意味がどこにあったのか疑問が残る。

(2) スクイの記録

スクイの記録としては、一七〇〇年代初頭の島原藩の文献が残されている。西村（一九六九）によれば、一七〇七年（宝永四）の検地の際にはスクイが一五八か所存在していた（表2）。そのことが、島原藩主松平忠雄の時代に完成した『島原御領村々大概様子書』に残されている。中には全長三六〇メートル以上に達する大規模なものもあった。旧藩時代、松平家は多くのスクイを構築して、功労のあった臣下に褒賞としてこれらを与えたという。

江戸時代後期、多比良村（現在の雲仙市国見町内）あたりの漁師の中にはスクイに関係するものもいた。当時の史料ではないが、国見町編（一九八四）は「漁師には本漁の他小船頭子がありすくひ（スキ）物がある」と記している。すくひ（スキ）物はスクイを利用する漁業者のことを指すのであろう。その業態は判然としない。文中にある「本漁」に対して副業的な意味をもったか、漁獲量が「本漁」に比べると少なかったことが想像される。すくひ（スキ）物についてさらに推論を加えるならば、これは、スクイを専業とした漁業者か、スクイを所有し、これを兼業していた農業者、あるいは所有者に雇われスクイの維持管理と漁業活動の一部を任された小作人的雇用者のいずれかであると考えられる。漁獲物は自家消費のみに限定されず商業的に取引されていたとみなければならぬ。

明治期のスクイの記録についてみよう。

一八八六年（明治一九）に発行された大日本水産會報第五四号に、東京在住の学芸委員という肩書をもつ水野正連が長崎県南高来郡の漁業概況を執筆している。佐賀県沿岸に続く同郡東北部の海岸は北目筋と呼ばれるが、ここにス

表2 島原藩領のスクイの数（1707年）

村名	数
三 会 村	10
三 之 沢 村	11
東 空 閑 村	2
大 野 村	14
湯 江 村	13
多 比 良 村	10
土 黒 村	34
西 郷 村	5
伊 古 村	3
伊 福 村	8
三 室 村	12
守 山 村	13
山 田 村	13
北 串 山 村	1
南 串 山 村	3
加 津 佐 村	1
口 之 津 村	5
計	158

『島原御領村々大概様子書』（西村 1969）による。

クイと称される漁場があつた。水野は、「鰯魚、烏賊等を捕ふ此漁場は本郡近傍特有のものにして未だ他に此の如き漁場あるを知らず」と述べ、スクイの構造を説明するとともに、一か所の広さは大きいもので一五〇〇〜一六〇〇坪、小さいもので二〇〇〜三〇〇坪であつたことを報告している。また、スクイ漁場が二二八か所あり、これに北高来郡諫早近傍にある三八か所を加えれば、その数は合計二五六か所に達するとした。水野はさらに、これらのスクイの大きさを平均五〇〇坪と換算し、全体では一二万九千坪、一年の漁獲量を一千坪あたり二〇〇圓とみなすと、全体で二万五千八〇〇圓の漁獲があると推定した。スクイは「干潮の際女子の手を以て捕獲し更に壯丁を勞せず又船楫網罟を使用するの費なき」ことから、利益が大きかったと分析している（水野 一八八六）。

一八九一年（明治二四）に発行された『水産調査豫察報告』は全国の水産事情を調査した報告書で、各地で漁獲される多くの魚種とその漁獲方法や漁法などが説明されている。第一巻第五冊は「九州西岸（從筑前至肥後）」の報告である。そのなかにボラについての記述があり、ボラ漁の漁法としてスクイが以下のように取り上げられている。

○ぼら

各種アリしゆくち最多シ竹崎方言之ヲまいをト云フ肥前高来郡及藤津郡沿海ニ於テ多ク之ヲ漁ス漁法ハ近岸ノ海中ニ方形ノ石垣ヲ築キ魚ノ満潮ニ乗シテ入り来ルヲ干汐ヲ待チテ撈取スルナリ方言之ヲ「スクヒ」ト称ス島原ノ近海ニハ其装置ノ大ナルモノアリ一回能ク数千圓ノ漁獲ヲ占ム此海ハ潮汐ノ干満ニ非常ノ差アルニヨリ此漁法最便ナリ

右記の説明で注目すべきところが二点ある。ひとつはスクヒの形状を方形としていることである。石垣にあたる波の強さをコントロールしたり、海岸地形に応じて石積みが築かれたりしたと考えた場合、方形になるのはむしろ少な

表3 長崎縣南高来郡における町村別のスクイの数（1893年）

町村名	数
島原町	0
湊町	0
島原村	0
杉谷村	0
三會村	21
大東村	17
湯江村	11
多比良村	10
土黒村	19
神代村	21
西郷村	22
伊福村	7
古部村	16
守山村	13
山田村	3
千々岩村	0
小濱村	0
北串山村	0
南串山村	1
加津佐村	0
口之津村	0
南有馬村	0
西有家村	8
東有家村	15
堂崎村	15
布津村	11
深江村	1
安中村	4
計	215

『長崎縣南高来郡町村要覧上編』（1893）による。

かったのではないだろうか。もうひとつは、スクヒを方言としてのことである⁽⁶⁾。それでは標準的な名称は何であったのか。石干見と推定して誤りはないと思うが、それを明らかにする記述を見出せていない。

また、一八九三年（明治二六）発行の『長崎縣南高来郡町村要覧』に、スクヒについて以下のような記述がある。

本郡中「スクヒ」ト称スル漁場アリ北目南目ニ多ク西目⁽⁷⁾ハ荒波ナルヲ以テ絶テ無シ其漁場ノ体裁ハ干潮ノ時干潟トナルヘキ地ニ適宜区画ヲ定メ陸地ノ方ヲ除キ三面ニ小石ヲ積ミ牆壁ヲ作ル或ハ円或ハ方、地形ニ依テ一ナラス潮来レハ牆壁深ク没シ遊魚其上ヲ往復ス潮漸ク退ヒ牆壁ニ囲マレ遊魚終ニ出ル能ハス皆雜魚ニシテ漁獲多キ者一年五六十円ニ過キス時ニ或ハ鰻鰯等ノ入ルアリテ巨利ヲ饒倖スル者アリ

説明は分布域、構築技術、形態と構造、漁獲高と漁獲物について、簡単ではあるが、きわめて的確に記述されている。なお、スクヒは合計二一六基あった（表3）⁽⁸⁾。

長崎縣が編纂した『漁業誌全』（一八九六）には、「須杭」漁場が掲載されている⁽⁹⁾。これは、「濱海遠干潟ノ地方

ニシテ本縣管下南北高来ノ両郡ニ於テハ数百ヶ所ノ漁場ヲ築造シ鰯鱸鮎等ノ雜魚ヲ捕獲ス」ものであった。スキイに對してどのような文字が良いかを判断し、「須杭」という漢字を充てたのであろう。須には「待ち受ける」という意味があり、杭は打ちこまれた棒の意味である。音が同じで意味が近しい漢字が充てられている。付図には須杭漁場として半円形の石干見二基が海岸に連なる様が描かれている（図3）。

ところで、国文学研究資料館にある祭魚洞文庫に、『熊本縣水産誌』という書物が所蔵されている。熊本縣が一八八三年（明治一六）に東京上野で開催された第一回水産博覽會に出品した同名書の写本である。ここには「干渕」という漁具の絵がある。石垣をサークル状に積み上げたものであり、沖側と思われる部分には二カ所の排水口（竇立て）が設けられている。絵の中には活動中の者が三人描かれており、一人が竇立てを見ている。残りの二人はそれぞれ別の場所で石積みを補修しているように見える（図4）。絵は、石の干出状況、作業内容からみて、干潮時のようである。干は留まることを意味する。渕は淵の俗字であり、水をたたえている場所を表す。人名に用いた時には「すけ」とも読む。熊本県地方は、石干見の名称でいえば、スキイ、スキ系の地域である。干渕にはどのような読みを充てたのであろうか。これを説明することも今後の課題のひとつである。

（3）カキの記録

カキに関する系譜論的研究はこれまでほとんどなされてこなかった。歴史的な記述も少ない。そこで本節ではカキを中心に据えて漁業発展過程をとらえた鳥袋源七の論文（鳥袋 一九五〇、一九七二）を引用しながら、カキの系譜についてまとめておきたい。

鳥袋は、前述したように、カキが沖繩における統一的な名称であるとしつつも、集落ごとに異なる名称が存在することを十分に理解したうえで、論文中において、古語である漁垣・魚垣（読みはナガキあるいはナカチ）と垣（カ

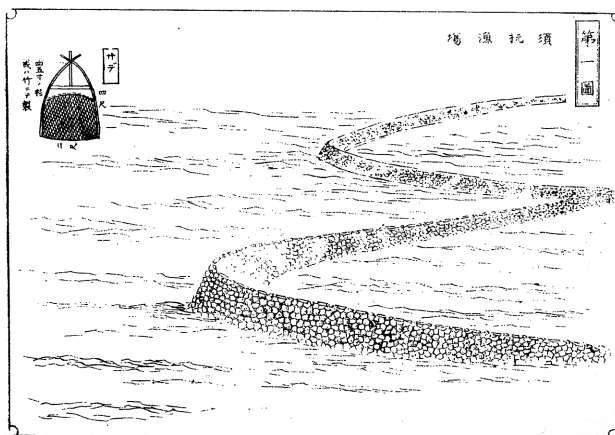


図3 有明海のスキ
長崎縣（1896）による。



図4 子測
国文学研究資料館蔵『熊本縣水産誌』（1883）による。

キ)をとともに使用する。

漁垣は、磯浜において海中の岩石を用いて八の字型に海岸へ向かって築いたものである。八の字、すなわちいわば袖に当たる部分は長さ約二町（約二二〇メートル）、石垣の高さは二尺（六〇センチメートル）程度である。小潮時に使用する垣は海岸近くにあった。これに対して大潮時に用いる漁垣ほど遠ざかったところに造られた。小潮時の垣を内垣（オキナマス）、大潮時の垣を外垣（ヘタナマス）と呼んだという。集落の中で漁垣を私有する特権をもつ者は宗教権をもった祝女^{のゐ}だけであつた。このような垣が祝女垣であつた。集落が支配者である按司^{あじ}の直領の場合には御料垣が造られ、漁垣守がこれを管理した。

島袋は、古代琉球における漁業に関する数々の例証およびおもろ双紙の中に歌われる漁業に関する語りを拠り所にして、釣り漁業以外の漁業と網漁業に注目しながら、漁業の歴史的過程を、漁（イサリ）の時代、漁垣の時代、漁垣と漁網との併用時代、出漁域を拡大した時代の四期に分けて概観した。

第一期にあたる漁の時代は、磯歩きや素手で岩陰に籠る小魚をつかみ取るサグリと称する漁法から始まる太古の時代である。手ですくう方法から発展したものがソウケ掬いと呼ばれるもので、底が浅く口が広い円形の竹製漁具が用いられた。この漁具は又手網や小網の類へと進展した。漁火をかざしておこなう夜漁もこの時代からのものと考えている。これらに銚が加わった。島袋は、これらの漁具がすべて原始的漁法であり、「漁具の必要を認めながら未だその工夫に至らず、人智もまたそれに平行して蒙昧なる時代であつたに違いない」と述べている。

第二期は漁垣の時代であるという。この時代は社会組織が確立し、集落の支配者すなわち、氏の長者を中心に漁場を分割所有して大家族の集団生活を営んでいた主漁副農の時代であつた。島袋は、この時代を勝連城の按司となつた阿麻和利が活躍した頃と設定している。主漁業時代から副漁業時代になって、漁業者の数が減少すると、集落内には漁垣の構築を希望する者がた。集落の規律に従い構築が許可された漁垣が、当時現存した私有垣であつたという。

漁垣は、経済的にかなり貢献していたと考えられている。慶長期に薩摩藩の管理下に入った時代から漁垣の売買が始められた。島袋は、大正時代初期に平安座において漁垣が二〇〇円という高価で売買されていたことから、慶長期当時の売買額は相当高価であったと推察している。

第三期は漁垣と漁網との併用時代である。網漁業が漸次併用されるとともに、漁業自体が一層発展した。網漁業は初期には刺網が主体であった。この時代には、沿岸漁業の域を脱しないしながらも、小舟を使用して水深が比較的深いところまで漁場を拡大した。近・現代へと続く漁法の根底になる部分が樹立した時代とみられる。漁垣があり、その一方で小舟に乗って漁網が使用され、活気を呈した時代であった。

第四期は出漁域をさらに拡大した時代である。漁垣の形は網の形に利用された。漁垣の捕魚部の構造は袋網に反映され、追込網、地曳網などがつくられ漁業生産はさらに発展をとげた。島袋はとくにふれてはいないが、現代へと続くこの時代には、動力漁船や大型漁網などの導入によって漁獲効率ははるかに上昇したわけであり、これに対して魚群の来遊を待つといういわゆるレシーブ型で効率が悪く、石積み補修のために常に労力を要する漁垣は、漸次衰退していったとみるべきであろう。

第三章 行政用語としての石干見

農商務省による行政文書およびこれに関係して作成された漁業権資料の中には、石干見という漢字表記が用いられている。一九一〇年（明治四三）四月、漁業における近代的な法整備として明治漁業法（法律第五八号漁業法）が公布された。これに合わせて同年一月に農商務省令第二五号漁業法施行規則が発令された。全六五条からなるこの規則の第二二条から第一四条までは、漁業種類について定めた条文である。第二二条は定置漁業の種類について規定し

ており、それらは、台網類、落網類、杵網類、建網類、出網類、張網類、魴簍類の七種であった。このうちの魴簍類については、「一定ノ水面ニ支柱ヲ以テ簍若ハ網ヲ建設シ又ハ竹、木、石堤等ヲ建設シテ陷穽ノ装置若ハ魚堰ヲ設クルモノ」との説明がある。翌一九一一年（明治四四）三月には農商務省告示第一四八号として、右に示した漁業法施行規則第一二条から第一四条に該当する漁業にはどのようなものがあるかが提示された。定置漁業のうちの魴簍類には三九種が掲げられている。これらのひとつとして石干見が並んでいる。法令等に石干見という用語が登場したのは、おそらくこれが最初であろう。石干見はイシヒビと読んだのか、あるいはイシヒミと読んだのか、読み仮名は付されていない。

告示第一四八号での表記は、「石干見一名すくひ（沖繩縣下ノかきヲ含ム）」となっており、石干見と同類の漁具として、「すくひ」と「かき」が農商務省においてすでに認識されていたことがわかる。しかも、石干見がこうした漁具の総称であり、「すくひ」、「かき」が、別名としてそれぞれ地域ごとの呼称のように扱われている。もっとも、石干見がいつ頃からこうした漁具の総称あるいは一般名として定着していったのかは判然としない。

一九一一年（明治四四）三月には農商務省告示第一七九号が出された。これは前述した農商務省令第二五号漁業法施行規則にもとづいて行政官庁へ提出すべき免許漁業に関する願書、申請書、および届出書の書式を定めたものである。このうち定置漁業免許願書は、区画漁業、特別漁業の願書と同様に、「漁場ノ位置及区域」（別紙漁場図ノ通などと記載）、「漁業ノ種類及名称」「漁獲物ノ種類」「漁業時期」「漁業権存続期間」を記載し、願書提出者住所氏名を記入して地方長官あるいは農商務大臣宛に提出する形式とされた。この書式によって作成された当時の願書が各地に残されており、一部は自治体史（誌）資料類などにも採録されている（有家町郷土誌編纂委員会編一九八一、吾妻町編一九八三、諫早湾地域振興基金編一九九四、椎田町史編纂委員会編二〇〇五、など）。「漁業ノ種類及名称」はいずれも「魴簍類漁業石干見」である。

各地の漁業権に関する記録と資料についてみておこう。

沖縄県における一九二四年（大正一三）の石干見漁業権免許の記録が、沖縄県内務部発行の『沖縄県水産概況』（一九二六）に残されている。魴筭類漁業類に入る石干見の漁業権数は組合有の一件であった（沖縄県農林水産行政史編集委員会編 一九八三）。

長崎県庶務課が一九二九年（昭和四）に調査した「昭和四年調査第三種定置漁場魴筭其他（第十一 共一七冊）」の綴りが長崎県立図書館に所蔵されている。これは「第〇種漁場状況調査表」（〇の部分には一、二、三といった数字が手書きされる）という書式の決まった文書であり、坪数、調査員、漁業種類、権利者住所氏名、漁場位置、免許年月日、免許番号、県税、備考の欄が設けられている。農商務省の漁業法施行規則に定められた書式に基づいて、地方行政庁が独自に作成した書類と考えられる。現地で調査にあたった調査員が各欄をうめていったものと思われる。石干見の場合、漁業種類には「石干見」と明記されているが、備考欄には、たとえば、「昭和三年七月頃ヨリ「スクイ」復旧漁獲アリ」「二年九月以降スクイ破壊シ、漁獲ナシ」など、調査員が地方名として使い慣れたと推察されるスクイという表記が用いられている。

佐賀県では、いわゆる新漁業法（昭和二四年二月一日法律第二六七号）が公布されたのちの第一次漁業権の切替時（一九五一年度）、石干見漁業権には、江切網、こうで待網、こうで四つ手網などとともに、「漁業管理委員会に於て操業定数定めること」という条件がつけられた。その後、第二次漁業権切替時（一九五六年度）には、石干見漁業は、ばかがい漁業、うばがい漁業とともに「漁業種類から削除するもの」とされた（佐賀県漁業調整委員会史編纂委員会編 一九九八）。このような経緯によって、石干見の名称は、水産行政のみならず漁業従事者の記憶から消えてゆくことになったと考えられる。

ところで、第一章では検討しなかったが、石干見に対してイシホミ、イシホシミ、イワホシミなどの読みを充てた

りする文献がある（高来町編一九八七、諫早湾地域振興基金編一九九四、有家町郷土誌編纂委員会編一九八一、など）。これらの呼称が地方名として、現在でも使用されているところもあった。たとえば、長崎県島原市大野浜にはかつて多くのスクイが存在した。明治時代、このうちの一基を所有した者に松本栄三郎氏がいた⁽⁹⁾。二〇一一年三月、栄三郎氏のひ孫にあたる松本輝夫氏に聞き取りをした際、氏は、スクイをイシホシミとも呼んでいたと指摘した。前述したように佐賀県鹿島市でイシアバの石垣をイシホシミと呼んだとする記録も残っている（佐賀県教育庁社会教育課一九六二）。こうした呼称は、通常は石干見をこれとは異なる地方名で呼んでいた地域において発生している。明治期以降に漁業権申請のなかで水産行政の用語として定着しはじめた漢字表記の「石干見」をはたしてどう読めばよいのか、個人あるいは集団が独自に読み方を考え、それが地域あるいは集団で保持された結果生じたものであると推論して誤りはないであろう。

他方、漢字表記の石干見が定着した結果、漁具に対する名称としてはこの文字を用いるものの、読み方としては旧来の地方名をそのまま用いた事例も確認できる（諫早湾干潟研究会編一九九五）。また、表題に石干見を用いながら、この読み方には触れず、本文中にはひらがな・カタカナ表記で地方名を用いた文献も数多くみられる（柴田二〇〇〇、布津町編一九九八、など）。これらはいずれもスクイを説明している場合に多い。地域の人々や研究者が、石干見が一般名として浸透したなかで、この文字に地方の呼称を充てなければならなかった困難さも読み取ることができる。

おわりに

石干見の呼称には、主としてイシヒビ系、スクイ系、カキ系の三系統がある。小論では、このことについて、あら

ためて整理するとともに、三つの呼称の分布域についても明らかにした。イシヒビ系の呼称が北九州の周防灘沿岸地域、スクイ系の呼称が長崎県から熊本県、鹿児島県など西九州から南九州西部一帯、カキ系の呼称が奄美諸島、沖縄列島、宮古列島、八重山諸島へと続く地域に分布している。

スクイ系の呼称は、さらにスクイ系とスキ系とに二分できる可能性もある。また、スクイ系とカキ系が南九州西部の一部地域で重なっている。他方において、スクイ系の分布する地域内に、イシアバやハトのように、スクイ系とは異なる呼称が存在することも明らかとなった。特にイシアバという呼称は、スクイが使用されている地域に隣接して存在する特徴的な分布を示すことがわかった。カキ系の名称についても、カキが転訛した呼称や、カキという語基の上に「魚」や「海」といった限定的な用語を加える呼称があつたし、過去には地域によって別の呼称も存在した。

石干見に関する呼称は以上のようにきわめて豊かである。各地域での呼称に関する詳細な調査がまだまだ必要であると考ええる。石干見がすでに消滅しているところも多いことから、石干見の存在を記憶する世代からの聞き取りを急がなければならない。これらの一連の作業は、冒頭で示した石干見研究の可能性と課題のうちの石干見データベースづくりと密接に関係するものでもある。

石干見は雑漁具の範疇にはいるが、これがいわば一般的な名称であり、スクイやカキは地方名とされた。福岡県と大分県の周防灘沿岸での呼称が定着し、標準とされたと推察されるが、石干見という文字が水産行政の用語として法令や漁業権申請書においてなぜ使用されるようになったのか、この用語が明治期、農商務省でいかにして正当性を得るようになったのかについても、依然として確たる解釈にはいたっていない。なお、水産庁漁場保全課（二〇〇二）が発行した広報誌『自然との共存を考えた漁業に向けて―伝統漁法に学ぶ―』には、「昔からある自然と共存している漁業」の一例として石干見（いしひみ）が紹介されていることを付け加えておく。

小論では取りあげなかったが、石干見という漁具・漁法の構造と分類自体にも必ずしも一定の理解が得られていな

いところもある。新たな資料を発掘することによって、今後也未解決の問題に迫りたいと考える。

「付記」小論を作成するにあたって、平成二三年度文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備推進事業」委託費による「国際常民文化研究」（神奈川県立国際常民文化研究機構）に関わる共同研究「漁場利用の比較研究」の研究費の一部を使用した。関係各位に厚くお礼申し上げます。図版の掲載に際してご許可くださいました国文学研究資料館、貴重な写真をご提供くださいました数内成泰・明子ご夫妻、日本語学の視点から様々なアドヴァイスを下さった関西学院大学文学部の大鹿薫久先生にも心よりお礼申し上げます。

註

(1) 福岡県築上郡築上町椎田を流れる城井川河口部では、ウナギを漁獲するために河原の石を七〇〇八〇センチメートルの円錐状に積み上げたいわゆる石倉のことを「石干見」と呼ぶ、という記述がある（西日本新聞社都市圏情報部編一九九九）。しかし、豊築漁業協同組合椎田支所への聞き取りによると、これをヤナと呼び、かつて海岸に石を積んで構築された定置漁具をイシヒビと呼んだという。漁具自体の分類にも関わる問題を含むが、現在までのところ筆者は十分な調査を進めていないので、小論ではこの問題は取り上げない。

(2) 「淋しい」を「さみしい」と言ったり、「さびしい」と言ったりすることが併存すること、また煙を「けむり」と言ったり「けぶり」と言ったりすることなど、「ま行」と「ば行」に見られる音のゆらぎと同じものと考えられる。

(3) 通常、各地では、おのおのかきやかちの前に小地名や人名、屋号などを冠して呼んだ。喜舎場（一九七七）は、八重山におけるかきとかちの個別名称を分類して提示している。

(4) 二〇〇九年三月一三日確認。

(5) 現在でも、農閑期に農業用水用のため池の水を抜いたり汲みだしたりして、水深が浅くなったところで魚をとることを「かいばり」と呼んでいる。

(6) 山口（一九五七）は、江戸期のボラ漁について、当時は網、釣、簀引、スクイ等によって漁獲したことを記している。ここではスクイが一般的な漁具名称と並置されている。

(7) 島原藩領の時代、島原城下を除く郡内を北目筋、南目筋、西目筋の三部に区分けした。北目筋は島原村、杉谷村から多比

良、土黒、野井、愛津の各村まで、南目筋は北有馬村から北へ安徳、中木場村まで、西目筋は千々石村から南有馬村までをさした。

(8) ただし、各町村に記載された数を合計すると、二二五基となる。

(9) 長崎県水産試験場の監修によって、『長崎県の漁具・漁法』が二〇〇二年に刊行された。後記には「明治三三年編纂の『漁業誌』以来の出版物（一八九六年発刊の『漁業誌 全』のことと考えられる。（一）内は筆者注）を意識して編纂しました」とあるが、本書には石干見は収録されていない。

(10) 松本栄三郎氏が所有したスクイでは、一八八一年（明治一四）、大量のボラが入り、一回の漁で約五千円の漁獲高を得たことがあった。当時、この額で一〇町（約一〇ヘクタール）の田畑を購入できたという。一晚で大金持ちになった栄三郎氏は、ボラを供養するため、鰯供養塔を建立した。この供養塔は現在でも大野浜にある。

参考文献

吾妻町編（一九八三）『吾妻町史』吾妻町。

有家町郷土誌編纂委員会編（一九八一）『有家町郷土誌』有家町。

諫早湾地域振興基金編（一九九四）『諫早湾漁業史―海と漁村の記録』諫早湾地域振興基金。

諫早湾干潟研究会編（一九九五）『諫早湾干潟の賢明な利用の実証的研究』諫早湾干潟研究会。

大島襄二編（一九七七）『魚と人と海―漁撈文化を考える』日本放送出版協会。

小川 博（一九八四）『海の民俗誌』名著出版。

沖縄県農林水産行政史編纂委員会編（一九八三）『沖縄県農林水産行政史 第一七巻（水産業資料編Ⅰ）』農村統計協会。

小野重朗（一九七三）『奄美大島のカキ（石干見）』、鹿児島県文化財保護課編『鹿児島県文化財調査報告書二〇』、鹿児島県二二

一―四〇頁。

小野重朗（一九八八）『出水地方の民俗（その六） 出水・阿久根のスキ（石干見）』北薩民俗八…一四―一七頁。

岸上鎌吉（一九〇五）『水産原論』成美堂。

岸上鎌吉（一九〇九）『増訂水産原論』成美堂。

喜舎場永珣（一九三四）『八重山における舊来の漁業』島二…二九九―三三二頁。

国見町編（一九八四）『国見町郷土誌』国見町。

河野通明（二〇一一）「検索手段としての民具の一般名―農具の歴史を踏まえて―」国際常民文化研究機構編『モノノ語り―民具・物質文化からみる人類文化― 国際シンポジウム報告書Ⅱ』国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所…
七―一八頁。

佐賀県教育庁社会教育課（一九六二）『有明海の漁撈習俗 佐賀県文化財調査報告書 第一一集』佐賀県教育委員会。

佐賀県漁業調整委員会史編纂委員会編（一九九八）『佐賀県漁業調整委員会史』佐賀県。

椎田町史編纂委員会編（二〇〇五）『椎田町史 民俗編』椎田町。

柴田恵司（二〇〇〇）『潟スキ―と潟漁―有明海から東南アジアまで―』東南アジア漁船研究会。

島袋源七（一九五〇）「沖繩の民族と信仰」民族学研究 一五―二・五〇―六二頁。

島袋源七（一九七二）「沖繩古代の生活―狩猟・漁撈・農耕―」谷川健一編『村落共同体』木耳社…九三―一八二頁。

水産庁漁場保全課編（二〇〇二）『自然との共存を考えた漁業に向けて―伝統漁法に学ぶ―』水産庁。

高来町編（一九八七）『高来町郷土誌』高来町。

武田 淳（一九九四）「イノー（礁池）の採捕経済―サンゴ礁海域における伝統漁法の多様性」九学会連合地域文化の均質化編

集委員会編『地域文化の均質化』平凡社…五一―六八頁。

多辺田政弘（一九九五）「海の自給畑・石干見―農民にとつての海」中村尚司・鶴見良行編著『コモنزの海』学陽書房…七一―一四三頁。

田和正孝（一九九八）「石干見漁業に関する覚え書き―台湾における石滬の利用と所有」秋道智彌・田和正孝『海人たちの自然誌―アジア・太平洋における海の資源利用』関西学院大学出版会…一五三―一八二頁。

田和正孝（二〇〇二）「石干見研究ノート―伝統漁法の比較生態」国立民族学研究报告二七―一…一八九―二二九頁。

田和正孝（二〇〇七）「伝統漁・石干見の過去と現在」小長谷有紀・中里亜夫・藤田佳久編『林野・草原・水域』朝倉書店…一四―二〇七頁。

田和正孝（二〇一一）「石干見研究の可能性―回顧と展望」関西学院史学三八…二九―六二頁。

中田祝夫編（一九七〇）『玉塵抄（一）』（国立国会図書館原本所蔵）勉誠社。

長崎縣編（一八九六）『漁業誌 全』長崎縣。

長崎県水産試験場編（二〇〇二）『長崎県の漁具・漁法』長崎県水産試験場。

長崎縣南高来郡役所編（一八九三a）『長崎縣南高来郡町村要覧 上編』長崎縣南高来郡役所。

長崎縣南高来郡役所編（一八九三b）『長崎縣南高来郡町村要覧 下編』長崎縣南高来郡役所。

西日本新聞社都市圈情報部編（一九九九）『海幸彦たちの四季——九州の伝統漁』西日本新聞社。

西村朝日太郎（一九六九）『漁具の生ける化石、石干見の法的諸關係』比較法学五—一・二・七三—一六頁。

日本学士院・日本科学史刊行会編（一九五九）『明治前日本漁業技術史』日本學術振興會。

入学正敏（一九七五）『篋（ヒツ）』宇佐の文化六・六頁。

農商務省水産局編（一九一〇）『日本水産捕採誌 下』水産書院。

農商務省農務局編（一八九二）『水産調査豫察報告 第一卷第五冊』農商務省。

福岡縣水産試験場編（一九一七）『福岡縣漁村調査報告 漁業基本調査第壹報』福岡縣水産試験場。

福岡縣水産試験場編（一九二七）『福岡縣漁具調査報告 豊前海之部 漁具基本調査第三報』福岡縣水産試験場。

福岡縣廳庶務課別室資料編纂所編（一九四九）『農務誌漁業誌』『福岡縣史料叢書 第九集』福岡縣廳庶務課別室資料編纂所…一

—一〇頁。

布津町編（一九九八）『布津町郷土誌』布津町。

平凡社編（一九三五）『大辭典 第二卷』平凡社（『大辭典 上卷』一九七四（復刻版）所収）。

松山光秀（二〇〇四）『徳之島の民俗——コーラルの海のめぐみ』未来社。

三井田恒博（二〇〇六）『近代福岡県漁業史——一八七八—一九五〇』海鳥社。

水野紀一（一九八〇）『奄美大島の石干見漁撈』史観一〇三・一一—一二七頁。

水野紀一（二〇〇七）『奄美諸島および五島列島の石干見漁撈』田和正孝編『石干見』法政大学出版局…一一五—一五〇頁。

水野正連（一八八六）『佐賀、長崎、福岡三縣下沿岸漁業概況（承前）』大日本水産會報告五四・二三—三三三頁。

柳田國男・倉田一郎（一九三八）『分類漁村語彙』民間傳承の會。

山口和雄（一九五七）『日本漁業史』東京大学出版会。

吉田敬市（一九四八）『漁業と自然環境——有明海の石干見とアンコウ網漁業』人文地理創刊号…三一—四〇頁。

与論町誌編集委員會編（一九八八）『与論町誌』与論町教育委員會。